

高校英語の授業における「国際貢献した日本人」のグループ発表報告

富塚 英和*

1. はじめに

2020年2学期に行った授業「国境なき医師団」の貫戸朋子氏を扱った課(Lesson)の後に、ライティング、およびグループ発表(発表は3学期)を行った報告である。この課では、貫戸氏が「国境なき医師団」に参加するに至った経過、スリランカの医療現場での経験、特に、回復の見込みのない男の子の患者に対し、残り少ない酸素ボンベの使用をせず、命の選別をしなくてはならなかった経験、そして、「国境を超えるとは何か」という貫戸氏の意見が展開する。

2. 対象, 指導時期, 使用教材

高校1年生2クラス(各クラス35~38人)。うち、各クラス10人前後が帰国生で、英語でのコミュニケーションに支障を感じない生徒である。時期は、高校1年生2学期、グループでの発表は

3学期に実施した。使用教材は『CROWN English Communication II』(三省堂)である。

3. 授業の流れ

この課でも、英語で本文の内容を説明しながら、プリントを中心に単語の定義、内容理解と進み、英語でのQAを行う流れで授業を進めていった。

4. ライティング

この課が終了した時に、以下のような英語の質問を投げかけ、貫戸氏の考えを、生徒自身の英語でまとめてもらった。

What do you think Ms. Kanto means by "crossing the board"? Explain in your words.

「国境を超える」という行為を英語で説明するに留まらず、質問の意図を汲んで国際貢献に言及する生徒が多かった(資料1)。

資料1 生徒による作品例

I think Ms. Kanto wants to tell some messages: "There is no discrimination and difference when we help people all over the world" and "We have to help each other and cooperate with countries all over the world to make a peaceful world".

"Borders" means a line separating two countries.

I agree with her opinion that Japanese people should actively cross the borders and practice some volunteers such as MSF.

* 成蹊中学・高等学校

資料2 「発表する 10 人の日本人」について説明したプリント

Lesson 4 Crossing the Border
[Research & Presentation]

Lesson 4 で学んだ「国境なき医師団」の貫戸朋子さんのように、世界各地で社会・国際貢献をしている日本人はたくさんいます。今回は、各グループで 1 人選び、その人物および活動について発表を行います。クラスで、同じ人が重ならないように、競合した場合は抽選にします。グループでリサーチをして発表します。グループ内の全員が発表するように分担してください。発表はパワーポイントを使っても、また印刷したものを使っても結構です。

- ・ 浅川智恵子【IBM、視覚障害者支援 Project】
- ・ 沢田教一【戦争写真家・ヴェトナム】
- ・ 池上千寿子【性科学者・ジェンダー・アフリカ】
- ・ 遠山正瑛【農学者・園芸学者・中国】
- ・ 緒方貞子【国連難民高等弁務官】
- ・ 徳永瑞子【助産師・看護師・アフリカ】
- ・ 栗本英世【地雷撤去・教育・カンボジア】
- ・ 中村哲【医師・アフガニスタン】
- ・ サーロー節子【被爆者、反核運動家・カナダ】
- ・ 安田菜津紀【フォトジャーナリスト、
貧困・難民問題】

資料3 メモの取り方を指示したプリント

メモの取り方例（原稿を書くのではなく、発表時に言うことを忘れないようなメモを作ると発表がうまくいきます）

発表する人物【貫戸朋子】グループ名【 J 】グループ内での順番【 3 】

- ・ … sent to Sri Lanka
- ・ … a boy / with his mother…
- ・

資料4 生徒が作成した発表用メモ（中村哲氏についての発表）

Presentation Sheet（メモ程度にまとめよう！）

発表する人物【 】グループ名【 】グループ内での順番【 】

メモ

- ・ *He went to Afghanistan for a medical campaign.*
- ・ *Many children who became weak were carried to Dr. Nakamura.*
- ・ *Because of a drought, they were short of water.*
- ・ *The children couldn't start getting thirsty, so they drank muddy water.*
- ・ *Dr. Nakamura started to build wells for them.*

（以下略）

5. グループ発表

1年に何度か、その課の内容に関する、5～6人の生徒による、グループ発表の機会を設けている。この課では、世界各地で国際貢献をした（または、現在している）日本人というテーマで、10人の日本人を生徒に提示し、その中からグループで1人を選んでもらい、発表してもらった（資料2）。

発表する人物を選んだら、各グループでその人

物に対するリサーチを行い、グループ内での役割を決める。グループ内の役割は、ポイントとして挙げた次の6点に従って決めるように指導した。

1. 発表する人物について説明する。
2. 必要があれば、その人物の生い立ちを説明する。
3. どこで、どのような活動をしたかを、社会・国際貢献を中心に説明する。
4. なぜそのような活動が必要だったのか、活

資料5 生徒作成によるパワーポイントのスライドの一例



動の場所の社会・歴史状況を説明する。

5. 必要があれば、短いエピソードを紹介する。
6. その人物・業績などに対する、グループのコメント、意見交換の結果をまとめる。

その後、各自の分担の発表原稿を作成させた。英語の原稿を書くというよりも、発表の時のメモを作らせるようにし、貫戸朋子氏について説明するとしたらという前提で、発表用メモの作り方も指導した(資料3)。英語の表現などの疑問は、富塚、もしくは週1回のTeam TeachingのALT (Assistant Language Teacher) に相談する時間を設けた。

発表当日、各自作成のメモ(資料4)を参照しながら発表するようにし、多くのグループがパワーポイントで発表を行った(資料5)。各グルー

プでの発表後、富塚とALTから簡単な質疑応答を英語で行った。

6. まとめ

1年間の授業の最後に授業アンケートを行った。英語の授業活動で「役に立った」「楽しかった」に、多くの生徒が、グループ発表活動を挙げていた。生徒にとっては、グループメンバーと力を合わせて英語の発表する活動が、チャレンジングであると同時に達成感のあった活動のようであった。

〔付記〕本稿は、成蹊学園サステナビリティ教育研究センターリレーコラム(24)(2021年7月2日web掲載)の記事を本誌に再録したものです。